

## 歴史サロン花畑「歴史講座」

- 1 演題 熊本は維新のバスに乗り遅れたのか
- 2 講師 猪飼隆明（大阪大学名誉教授）
- 3 日程 令和5年2月9日（木） 午後2時～3時30分
- 4 場所 桜の馬場城彩苑2階 多目的交流室

### 【講演録】

#### はじめに

熊本の歴史家の皆さんが明治維新の話をする時、一様に熊本は維新のバスに乗り遅れたんだと言うんですね。維新の薩長土肥の「肥」がなぜ肥前であって肥後でないのか。それがなぜかというのが一番大きいんですよ。肥後が幕藩体制の中で存在感を示していたのに対し、肥前は隠忍自重していて、維新の土俵に出てきたのは上野戦争の時ですから。

その上、徳富蘆花が『竹崎順子』に「肥後の維新は、明治三年にきました。それは横井小楠がかねて囑望し遠ながら誘掖して置いた世子細川護久が家督を相続し、熊本藩知事となり、勅許を得て弟長岡護美と藩政改革に帰ってきたのが、きっかけでした」と書きました。護久・護美の改革が明治三年。だからよその藩よりも二年遅れて明治維新がきたんだという意識、ある意味熊本の劣等感に近いようなものがこの中にあるんです。だが果たしてそうか？というのが今日の話です。

#### 1. 明治維新の始期および終期－維新認識の基礎

維新の始めと終わりはどこかという話をします。ものごとには必ず出発点があり終わりがあります。それを何に置くかというのが大変大きな問題なんですね。

維新の始期で最も多い説はペリーの来航です。この西洋の衝撃を受けて、日本はここから近代へ出発した、つまり明治維新はここから始まったとする説です。

第二の説は天保期です。ほとんどの藩が経済的に上手くいけなくなって、改革の必要性を認識して、下士層が動き始める時期です。それに輪をかけたのがアヘン戦争です。清国——中国がイギリスの東インド会社の軍隊と戦争をして負けました。ここで一番衝撃を受けたのが武士の下士層、若い層です。彼らの文化と学問の源が敗北して、学問そのものをもう一度問い直す必要があるとして、彼らは『近思録』を読み始めます。『近思録』とは、朱子学というのはこうしてできたという言説を集めた、いわば朱子学の原典です。藩はそれらの人たちを藩政改革に使い、あるいは若い人たちが自身も肥前の義祭同盟のような組織を作り始めました。薩摩の西郷・大久保、土佐のおこぜ組、熊本の横井小楠・実学派もこの流れの中にあります。僕が高校の教科書を書いたときは、この天保期の変革主体形成期が明治の始まりだと書きました。

そして第三の説が今の僕の主張で、もう少し前の文化・文政期です。中国はアヘン戦争で負けて南京条約を結びます。問題はそこで内地雑居——外国人がその国の中に住んで良い、つまり同居・雑居が認められたことです。その背景は市場（マーケット）にあります。イギリスが欲しいのは絹糸です。その市場は産地周辺の内地のみですから、取引のためには内地雑居が必須になるんですね。そして内地に行くには、いつ襲われるかわかりませんから軍を伴って商売活動をするわけです。結果、中国は蚕食状態されていきます。

日本の場合、この内地雑居を許しませんでした。北は松前から南は薩摩まで、日本全

土が一つの市場になっていたのは文化・文政期です。日本が開港したときの横浜はそれまでなにもない片田舎でしたが、開港の数日後には売込商が港に店を作っています。これは開港時すでに日本が一つの市場になっていたことの証左です。つまりこの市場がどこまでできていたかが、交渉を開始してから以降の日本、中国の命運を決めました。日本も従属的な貿易で、非常にハンディのある条約を結びましたが、それでも蚕食された中国のようにはなりません。これが文化・文政期の国内市場形成期に維新が始まったと見たが良いのではないかと理由です。

まとめるならば、そういった市場という条件があって、藩の財政問題とアヘン戦争が形成した変革主体が活動し始め、ペリーが来て軒並みショックを受けて攘夷か開国かでわあとなる、そういう動きが維新を作っているというわけですね。これが出発点。

では明治維新はいつ終わったのか。一時期まで多かった説は西南戦争ですね。西南戦争は士族の反乱の最大規模で最後のものです。禄を失い帯刀を禁止された武士が不平を募らせ、封建社会の復活を願って反乱を起こしたが、失敗に終わって封建社会に戻る道が絶たれたという主張ですが、僕はこれは間違っていると思っています。佐賀の乱の憂国党、熊本の神風連など、武士の中にももちろん不平不満はあるんですよ。しかし問題の本質は、彼らの声が権力に届かないということなんです。明治維新によって作られた権力の基本は、一番上にいる天皇自ら政治を行う（親政）こととなっています。しかし天皇は当時まだ十五歳。天皇と政策上の話ができるのは太政大臣、三条実美ただ一人です。その三条を動かし、実際の意思決定をしているのは右大臣岩倉具視、参議大久保利通。ここに他の者が入る余地がない。これが明治政府の意思決定の基本的な問題で、武士たちの不平であり不満であって、昔は良かったのという話では全然ないんです。

一般的にテレビの歴史ものなどで出てくるのは、大政奉還です。しかしこれも間違いです。慶喜は政権を交代したところで、国に政権を維持する能力がないことをよく分かっていて、実質的には自らの権力を維持できるという判断をやったんです。実際の維新政権に絡むのはその二か月後、慶応三年十二月九日の王政復古クーデターです。これで権力の質が本質的に変わって、慶喜が返り咲く能力と機会を失います。だから鳥羽伏見の戦いが起き、上野戦争が起き、倒幕戦争になるんです。

これが社会が変わる契機となりますが、しかし封建制・幕藩体制を潰したのはいつかとなると、新しくできた権力によって行われた明治四年の廃藩置県ですね。廃藩置県の在り方が、近代の一般的な社会の形成にとって大きな意味を持つわけです。だから僕は明治維新の終期はどこかという、廃藩置県と答えます。つまり王政復古クーデターを経過して廃藩置県で終わるとするのが明治維新の終わりであり、大まかな全体像となります。

## 2. 王政復古クーデターと熊本藩

では王政復古とクーデターで、藩と熊本はどういう態度をとったのか。クーデター前日の慶応三年十二月八日、熊本藩は御所にある九つの門のうち寺町御門の警備を任されています。この中心は京都所司代・京都守護職の会津と桑名で、この時の熊本藩は尊王佐幕派のひとつとして在るわけです。

この日の朝議の議題は三点あります。一つは、禁門の変で朝敵となった長州、毛利父子をどうするか。第一次長州征討のときに家老他四人が腹を切っているのに、この上まだ長州を潰すのかと。これがようやく認められると、大久保はこの日西宮で待機をしていた長州に使者を送ります。ここで入京を許されるわけです。残りの議題である兵庫港の開港、

大阪の開市も認められて、朝議が終わってみんな一斉に帰るのが翌日の朝です。熊本藩から出席していた二人、三宅藤右衛門と京都留守居の池辺吉十郎も帰ります。熊本藩が任せられていた寺町御門は、ここで薩摩藩が警備を交代します。クーデターに加わったのは、薩摩・芸州（広島）・土佐・尾張・越前の五藩です。この五つの藩の兵隊達は、そのときまで御所の床下でじっと待機をしていたわけです。御所の建物は高床式ですから。どの藩の兵隊がどこに入るかを紙に書いて指示したのは岩倉で、動かしたのは西郷です。薩摩藩兵を含めた軍事指揮権は、藩主でなく西郷の手にあったんですね。

ここで御所にいるのは、天皇、公家の主要な人達と五藩の藩主ないし元藩主です。各藩からそれぞれ二人ずつ藩士が付きます。小御所会議です。中心となるのはこの直前に入京を許された岩倉で、王政復古の号令を読み上げます。土佐が異議を発するなど議論は進みませんが、休憩の時に、西郷が武力で納得させるしかないという方針を決めます。それを伝えた途端に流れはガラッと変わります。これで決まりです。これがクーデターです。これは全部制圧されているから可能なんです。しかも熊本藩の記録を見ると、どうもおかしいと言いながら、何が起きているのかわかっていなかったんですよ。御所門の一つを元々警備していて、しかも朝議に出ていた彼らにすら、結局わからないうちに事が進むような静かなクーデターだったんです。

### 3. 戊辰戦争と熊本藩

慶喜は八日の朝議にも出席せず、二条城にいました。成り行きは理解していますから、断らざるを得なかったんです。しかしクーデター後、二条城にいてもダメだということで大阪城に行って情報収集をします。そこで江戸で薩摩藩邸が襲撃されたというニュースが入ってきて、これならば反乱を起こしても付いてくる藩が多いだらうと判断するわけです。これが鳥羽伏見の戦いの原因ですね。

鳥羽伏見の戦い直前、熊本藩は世子・護久が兵を率いて大阪に降りています。慶喜から大阪城に来いと召命されるんですが、彼はそれをやり過ぎて京都に入るんですね。この時に大阪城に行っていたら、完全に負け戦の中ですよ。これが唯一、後につながります。この時すでに長州は京都に入っていて、薩摩の軍隊を合わせて五千です。慶喜の軍隊は一万五千で、普通だったら薩長が負けますが、士気が違いました。

熊本藩はこの戦争の時に、京都にいて動かなかったんです。これで決着がついて維新政府が定着するのかわからないですから、日和見で見ているわけです。これがバスに乗り遅れたといわれる所以でしょう。この後、熊本藩は上野戦争でやっと二百余の兵を出します。佐賀藩が一気に頭角を現した時です。しかも熊本藩は軍資金を渋るんです。遅れてようやく出したのが求められた三分の一で、これも最後の藩主韶邦が新政権から疎まれる理由なんです。

### 4. 横井小楠の徴士・参与と暗殺

新政権は岩倉・大久保・三条が動かしているわけですが、新しい役人の調達を藩に依頼すると、公議政体派というもう一つの路線が出てくるわけです。そこで新政権は幕府・諸藩の枠を超えて、「個人」をピックアップするわけです。この「徴士」は自分の出身藩との縁を切りなさいと言われます。つまり今までの藩の臣ら朝臣になれということで、薩長土肥政権というのは誤りです。木戸孝光は毛利との縁を切れと言われて悩み、大久保は一番早く切ります。土壇場で結局藩と縁を切ることができなかったのが西郷で、これが反乱に

つながるんですね。新政権はこういった身内を集めて朝臣として、五箇条の御誓文と、意思決定プロセスを定めた政体書によって、有司専制のシステムを作るんですね。横から天皇に何らかの形で話をする事ができないようにするわけです。

熊本ではクーデターが起きた九日後に、横井小楠をが新政府に招聘されました。参与で別格待遇です。とりわけ岩倉に頼りにされていたんですが、在任期間は二七七日間だけでした。しかもそのうち御所に出かけて会議に出席したのは三分の一くらいで、あとは病気です。明治二年一月五日に寺町御門から出て丸田町で襲撃され、暗殺されましたが、これで熊本と新政権の縁が切れたかというところではなくて、小楠の弟子の実学派の人たちがたくさん起用されました。嘉悦氏房や安場保和など、みんな個人でピックアップされて新政府に入っていった人達です。

## 5. 実学党政権と廃藩置県

そのようなバックがありながら、最後の藩主韶邦は佐幕を捨てられなかったんです。これをなんとかしないと新しい政権はできません。長岡護美が明治三年三月二十八日に大久保に宛てた手紙に、護美の兄である護久が兵を率いて上京するとあります。「当藩に於て…旧来之陋習容易に破却不得候間、今般拙兄上京に決議、万般朝旨を奉し、…断然一新之心決にて、異義に及び候輩は不得止一刀両断之決…」

それだけの決意をもって韶邦に退位を迫り、護久は藩知事になりました。そして最初に出したのが「村々小前どもえ」です。この領民に宛てた布告で、百姓の重い負担となっていた雑税が廃止されます。小作人に利益が及ばないという批判もありましたが、こんな画期的なことをやる藩は他にないんですよ。熊本藩領ではこれを喜んで知事様祭りが行われました。そして藩領外では、熊本藩並みに減税しろという一揆が熊本藩を囲むように明治六年まで続いたんです。影響が大きく一揆を誘発するということで、結局この政権は潰されることになるんですが、ほかにも役人の公選性や熊本城の破却など、この政権はたくさんの新しい政策を出しているんです。

元の問題に戻りましょう。熊本は維新のバスに乗り遅れたのか。廃藩置県が明治維新の最後だと言いました。廃藩置県というのは、統一国家にするため、今までの藩の支配をやめさせるのが基本です。実際には、藩の名残をできるだけ消すんです。トップを変えて殿様を東京に常駐させ、県の役人はよそから来た者がやるんです。しかし熊本は、知藩事護久が免職になっただけなんです。他は全然動きません。政権のトップは長岡護美大参事で、廃藩置県によっても画期的な実学党の政権はそのまま維持されるんです。つまり廃藩置県で生まれる新しい体制のモデルケースがこの藩にあるわけですよ。新政権における地方統治支配の在り方の、いわばもっとも先進的なものが熊本によって行われていて、廃藩置県後に各藩で実施された県政移行が、どこよりも先んじて行われていたということなんです。しかも内地雑居は許されていないのに、L.L. ジェーンズを教師として招くということまでやってのけています。これは果たして「バスに乗り遅れた」と言えるかどうか。

## 6. おわりに

歴史というものは、どこに目を据えて歴史の展開を見るかというのが大事という話です。極東の小さな国を外国が侵略しようと思っているときに、クリミア戦争やアメリカの独立戦争で軍事力を出す機会が阻害されるという幸運もありました。しかしそれ以上に、主体的条件を自ら作ってきたという、民衆の力量が大きいと思うわけです。